

発話修復場面における「なんか」の使用について

The Use of Japanese “*Nanka*” in Repair Segments

杉 崎 美 生

SUGISAKI Miki

[要旨] 本研究は、発話修復場面における「なんか」という語に着目し、その談話上の働きを明らかにすることを目的とする。26組の女性参加者が、各々約5分間「びっくりしたこと」を語る会話データを用い、発話を修復する際に「なんか」を使用する場面を分類し、その働きを分析した。その結果、「なんか」を用いた修復は、話し手が聞き手の理解を考へ不足している情報を補う「聞き手志向型」、さらに、話し手が聞き手を「びっくりしたこと」へと正確に導くために発話の修正を行う「話し手志向型」の二つに分類されることが明らかになった。これらの結果から、発話修復場面に用いられる「なんか」が、参与者間の相互理解の達成に寄与していることを主張する。

[キーワード] 「なんか」、聞き手志向型、話し手志向型、ローカルなテーマ、グローバルなテーマ

[Abstract] This study seeks to determine the discourse functions of the word “*nanka*” (i.e., anything or something) in repair segments. Data were collected from the “Mister O Corpus,” a cross-linguistic video conversation corpus wherein 26 female pairs talk for five minutes about what surprised them most. It was found that “*nanka*” was used in: 1) a listener-oriented repair when the speakers were providing additional information for listener clarity; or 2) a speaker-oriented repair when the speakers were trying to modify their utterances to precisely focus the listener’s attention to the speaker’s topic. These findings suggested that using “*nanka*” as part of repair segments contributed to the development of a mutual understanding between the participants.

[Key Words] *nanka*, listener oriented, speaker oriented, global theme, local theme

1. はじめに

話し手にとって、聞き手にわかりやすく話すという配慮は望ましいことだが、会話においては言い直し、言い淀み、言い換えなどの表現が多く見られ、話し手の語りは、必ずしも聞き手に分かりやすいものになるとは言えない。このような言い直し、言い淀み、言い換えなどの表現は、会話分析 (conversation analysis) において「修復 (repair)」という概念 (Schegloff, Jefferson, and Sacks, 1977; Schegloff, 2007) で研究がなされてきた。そのような中で、本稿では、会話修復場面に度々現れる表現「なんか」の使用についてその談話上の働きを明らかにすることを目的とする。「なんか」という語は従来、つなぎことばや言い淀みとして、時には不要なものとも考えられてきた。また、その機能について分析が行われてきたが、会話修復場面におけるその使用との関わりについての研究はまだ見られない。日本語でのコミュニケーションを考えるにあたり、

「なんか」のように、発話されても発話されなくても命題に変化が見られないような語が、発話修復の場面に使用されるのはなぜか、また、修復場面で「なんか」と発話する時、話し手と聞き手との間にどのようなコミュニケーションが存在するのか、本稿ではこれらを明らかにすることを目的とし分析を行う。

2. 会話修復場面で用いられる「なんか」

会話において、話し手は自らの発話した語や表現を修正したり、内容の修復を行ったりするとき、「なんか」と発話することがある。

(1) A: いろいろともめごとが、もめごとっていうか、なんか、
後継ぎのこともめたらしくって

B: うん

(J-7)

例(1)では、話し手Aが友人の家族に起こったことを話している。話し手Aは「もめごとが、もめごとっていうか」と同じ語を二度繰り返した後、「後継ぎのこともめたらしくって」と、「もめごと」の内容を詳しく示す形に修復しているのが分かる。本稿では、このような発話修復の場面に「なんか」が用いられる部分を対象に分析を行う。

3. 先行研究

3.1 修復に関する研究

修復という言語現象は、これまで会話分析 (conversation analysis) において議論が行われてきた。この分野では、話し手がトラブル源 (trouble source) となる発話を行ったとき、その修復を行うための相互行為的な会話の組織化について説明がなされてきた (Schegloff, Jefferson, and Sacks, 1977; Schegloff, 2007)。会話分析では、修復の一連のシーケンスは、問題を明示化し (修復の開始)、何らかの解決が施行されること (修復の遂行) から構成されると説明されている。また、これらは「自己開始自己修復」、「自己開始他者修復」、「他者開始自己修復」、「他者開始他者修復」の4つの型に分けられるとされる。

Nakatani and Hirschberg (1993) では、言い直しにはある一定のパターンが存在することを主張し、修復区間モデル (Repair Interval Model) を提唱し、言い直しを三つの区間に分けて分析している。1つ目の修復対象区間 (reparandum interval) では、話し手が発話において問題があると考えた箇所を明らかにし、2つ目、フィラーなどの非流暢区間 (disfluency interval) を経て、話し手は正しい表現を修復区間 (repair interval) において発話するとしている。また、船越・徳永 (2004) では3つ目の言い直しの種類を分類し、Nakatani and Hirschberg (1993) を援用して、言い直しの表現モデルが存在することを説明している。

表1 言い直しの分類（船越・徳永 2004より作成）

| | | |
|----|-------------------------------------|---|
| 1. | 繰り返し（同一語句） （言いかけた語） | 「どちらが <u>遠い</u> 、 <u>遠い</u> ですか」 「建物の、 <u>なん</u> 、 <u>何階</u> ですか」 |
| 2. | 言い換え（助詞） （言いかけた語句） （語） （文） | 「この中で一番遠い店 <u>は</u> 、 <u>を</u> 教えてください」 「では、丸井の場所を <u>し</u> 、 <u>おし</u> えてください」 「第一銀行、あ、第一金庫は、どう行けばいいですか」 「カフェはありますか、近くに、駅の近くにカフェはあり <u>ますか</u> 」 |
| 3. | 挿入（句） | 「この中で一番遠い、 <u>駅から一番遠い</u> 店はどこですか」 |

丸山（2008）でも同様に修復の特徴に着目し、5つの分類を用いて説明し、修復のモデルとして、修復がなされる被言い直し部、フィラーやメタ的表現などが発話される中間部、実際に修復を行う言い直し部という三段階があることを主張している。

表2 言い直しの5類型（丸山 2008より作成）

| 修復の特徴 | 例 |
|---------------|--|
| 発音誤りに伴う言い直し | 「コンテキストいぞ、 <u>依存モデル</u> を使う」 |
| 単純な繰り返し | 「その下の、おー、 <u>波線</u> 、 <u>波線</u> を付けました」 |
| 語の選択誤りに伴う言い直し | 「同音異義を <u>分別</u> 、えー、 <u>弁別</u> しているという」 「短調独特の <u>旋律</u> の、え、 <u>旋律</u> を形作っている」 「クロマというのは <u>音名</u> の、え、 <u>に</u> 相当するものです」 「明瞭には見え、 <u>見られない</u> ということですよ」 |
| 情報不足に伴う言い直し | 「入ってきた <u>途端</u> にショーケース、 <u>ドーナツ</u> のショーケース」 |
| 別表現への言い換え | 「起床は、あの一、 <u>朝起き</u> るのは、二時から三時ぐらいで」 |

これらの先行研究から、話し手は修復を行う際、発話した表現が誤りであると気づき、どのように言い直すかを考え、正しいと思われる表現を付け加えるという三つの過程を持つと説明することができる。本稿では、この過程をそれぞれ修復対象部、編集表現、修復部と定義し、以下の図のように提示する。

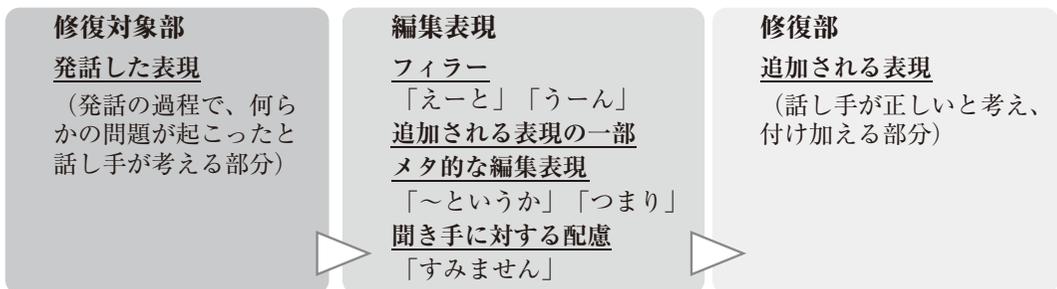


図1 修復の過程

修復対象部は、話し手が発話の過程で何らかの問題が生じたと気づく部分である。修復対象部から、実際に修復されるまでの間に発話される編集表現は、フィラーやメタ的な表現などで現れる。つまり、この編集表現は「修復対象があるということに気づいた話し手によって、実際の修復までの間になされる表現」と定義できるだろう。「えーと」、「うーん」などのフィラーは、次の修復部で発話される語や表現が即座に産出されない状態を聞き手に示すことができる。また、「～というか」や「つまり」などのメタ的な編集表現は、修復対象部で発話した表現や内容を修復部で言い換えて説明するときで使用されると考えられる⁽¹⁾。最終的には、この過程の修復部において、正しいと考えられる表現が付け加えられることで修復が完了する。

3.2 「なんか」の先行研究

先の例(1)のように、話し手が修復を行うとき、「なんか」という語が共に用いられることがあるが、発話の修復に関する「なんか」の研究はこれまで行われていない。「なんか」は名詞「なに」に助詞「か」がついた連語で、語源は不確かさや曖昧さであるとされている（日本国語大辞典 1975、大辞林 1999）。用法は主に二つあり、一つ目は「なにか」と置き換えて意味の変わらない代名詞的用法であり、内容がはっきりしない事物を指し示す用法である。二つ目は、「なんだから」と置き換えられる副詞的用法である。この副詞的用法は、述部を修飾し、はっきりとしたわけもなく、ある感情が起こるさまを示す用法である。代名詞的用法、副詞的用法のどちらも現在使われているものだが、実際の会話では辞書的用法だけでは説明できない例も多く見られる。

田窪・金水（1997）では「なんか」は言い淀みの語（フィラー）であるとし、「なんか」を「だいたいこんな感じ」という心的状態に対応する形式としている。鈴木（2000）では、「なんか」が発話内容の暗示（変化の予告や強調）、話し手の発話内容への態度を曖昧にする機能を持つと主張している。また、内田（2001）は、「なんか」が“新しい事柄（new concept）”（Halliday 1994、Chafe 1994）と共に現れることを指摘し、①話題開始、②話題の発展、③発話内容の具体化、④次の部分へのつなぎ、⑤引用、⑥話題対象への評価などの機能に分類している。さらに、飯尾（2006）では、「なんか」は①話題の開始（turn initiator）、②フィラー（filler）、③和らげ（softener）の機能を持つと説明している。杉崎（2019）では、会話に使用される「なんか」を共起する語から分析し、この語が「次の発話内容をイメージとして持ち、談話を駆動させる働き」を持つことを指摘している。多くの機能を持つと分析されてきた「なんか」であるが、発話の修復場面で用いられる「なんか」の働きを議論した研究はこれまでになく、「なんか」の働きが会話の修復時にどのように関わっているのかを探る必要がある。

4. データと分析方法

データは26組の女性参加者が、各々約5分間「びっくりしたこと」を語る「ミスター・オー・コーパス」⁽²⁾の会話を使用した。5分間の会話は録音されており、その全てのデータは文字化されている⁽³⁾。対象データ数は日本語会話26例（先生・学生ペア13例、学生・学生ペア13例）であり、合計395例の「なんか」が抽出された。先行研究で示されたような修復の過程で上記の例

文(1)を考えてみると、話し手Aは、「もめごとが、もめごとっていうか」という発話を何らかの問題があると捉え、「なんか」と発話した後、正しいと考える表現「後継ぎのことでもめたらしくって」を追加していると捉えることができる。

(1) A：いろいろともめごとが、もめごとっていうか、なんか、

後継ぎのことでもめたらしくって

B：うん

(J-7)

これを図1で示したような修復の形として考えると、以下の図のように示すことができ、「なんか」を編集表現と捉えることができる。

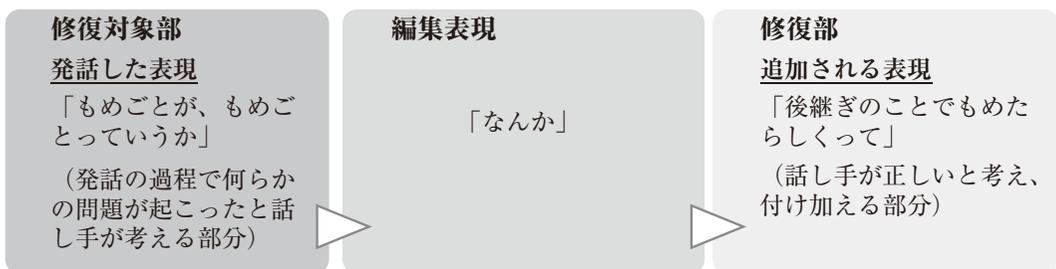


図2 「なんか」を用いた修復の過程

本稿では、このような修復の過程を持つものを、「なんか」を用いた修復の例として分析を行うこととする。また、会話分析では「自己開始自己修復」、「自己開始他者修復」、「他者開始自己修復」、「他者開始他者修復」の4つの修復の形が見られたが、本稿で取り上げた修復はいずれも、話し手が「びっくりしたこと」を話す過程で、自らが発話内容に問題が生じたと気づき修復を行っていることから、「自己開始自己修復」に属するものであると捉え、分析を行う。

5. データ分析

データ内には、図2のような特徴を持つ「なんか」を用いた修復は、「なんか」という語が発話された総数395回の中で7例見られた⁽⁴⁾。これらの特徴ごとに分析し、分類を行った。次の表3で示す通り、第一の「情報を補足する修復」は、話し手が聞き手に対して情報が不足している、または、明確でないと感じるときに現われるという特徴を持つものである。第二は、「トピックに直結する修復」であり、話し手が最終的に「どのような点にびっくりしたのか」という部分に大きく関わりを持つ要素を修復するという特徴を持つ。

表3 「なんか」を用いた修復の特徴と数

| 修復の特徴 | 例 |
|-------------|----|
| 情報を補足する修復 | 2例 |
| トピックに直結する修復 | 5例 |
| 合計 | 7例 |

以下では、それぞれの特徴を持つ「なんか」を用いた修復を例示し、説明する。

5.1 情報を補足する修復

事例1は先生と学生のペアによる会話（Rは先生、Lは学生）である。話し手Lは、自分の自宅のベランダが広々としていて、鳩などの鳥もやってくることを話し、快適に過ごせる空間として捉えていることを伝えている。ところがある日、ベランダの奥の方に鳩がいて、急に大きな音を立てて飛び立ったことにびっくりしたと話している。

(事例1)

001: L: ところが、この前の日曜日は=
 002: R: =はい
 003: L: なんか、ベランダのドアを開けたら=
 004: R: =はい=
 005: L: =突然ばたばたばたば [たって
 006: R: [へえ、はい
 007: L: 鳩 [が、なんかベランダの奥のほうにいたらしい鳩が
 008: R: [えっ、えっ、あ、はあ、はい=
 009: L: =飛び立ったんですよ

(J-19)

話し手は1行目で「この前の日曜日」、3行目で「ベランダのドア」と出来事が起こった時や場所について言及し、5行目で「突然ばたばたばたばたって」とオノマトペを用いて、何かが動いた音を表現している。しかしこの表現を、話し手Lは7行目から9行目で修復している。

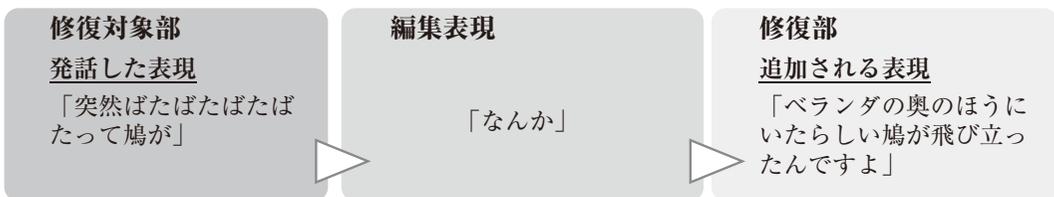


図3 事例1における「なんか」が用いられた修復の過程

修復対象部でLが発話した「突然ばたばたばたばたって鳩が」という表現は、主語（「鳩が」）と

述部（「突然ばたばたばたばたって」）が逆転して倒置が起きている。日本語の会話において、述部が先に発話され、主語が後にくるとは珍しいことではないが（藤井 1995、Kinjo 2000、富樫 2000）、話し手はこれに気づき修復部において語順を変化させている。また「突然ばたばたばたばたって」についても、オノマトペを用いた表現では聞き手に正確な状況を示すことが難しいと判断し、修復部において「飛び立ったんですよ」と言い直し、修復を行っている。また、出来事において基本的な情報である、鳩がいた場所「ベランダの奥」という要素を修復部に追加しているのが分かる。

次の例は、先生と学生のペアによる会話（Rは先生、Lは学生）である。話し手となったRはアメリカの田舎の町を訪れたとき、現地の人に顔を見られ、なぜか大笑いをされたという話をしていて。話し手Rは「なんか」を編集表現に使用した修復によって、発話内容を言い直している。

（事例2）

- 01: R : うん [笑い]、アメリカのなんかメイン州っていう、
 すごく田舎のところに行ったんですね、[それで]
- 02: L : [はい]
- 03: R : でー、もーなんか日本人は見たことないっていうような
 人たちが住んでる島に、一人 [でちょっと行ったんですね]
- 04: L : [はあ]
- 05: R : そしたら、相手の人が、アメリカ人が私の顔を、あ、なんか、
車を運転して、ちょっと道が分からなくなったんで
- 06: R : その店の、店に、えーた、ちょ、あのなんかちょっと飛込みで
ある店に地図を持って道を聞きにいったんですね
- 07: R : そしたら、相手が私の顔を見て、[大笑いした [笑い]、
 すごくびっくりした [笑い]
- 08: L : [うん、えー]
- 09: R : こっちも、なんかこんな顔見たことがないっていう、
 ぷーっとかって吹き出されちゃって

(J-25)

話し手Rはエピソードの開始部分で「メイン州という田舎」（1行目）を提示し、その場所に住む人々が「なんか日本人は見たことない」（3行目）と、日本人にあまり馴染みがない様子を表現している。そして5、6行目で、Rは二つの修復を行っている。まず5行目でRは、このエピソードにおける「びっくりしたこと」を語ろうとし、「そしたら、相手の人が、アメリカ人が私の顔を」と、メイン州の田舎の人がRの顔を見て笑ったという話に移ろうとしている。しかしRは、聞き手にここまでの状況を詳しく説明できていないと感じたのか、「あ、車を運転して、ちょっと道が分からなくなったんで」と、車を運転していたことや道に迷ったという情報を「なんか」に付加し、修復部で発話の修復を行っている。同様に6行目でも、修復対象部で「その店の、店

に、えーた、ちょ、あの」と、笑った人がいた店のことを話そうとしているが、編集表現「なんか」を発話し、修飾部で「ちょっと飛込みである店に地図を持って道を聞きにいったんですね」と、店を訪ねたときの様子を詳しく語っている。そして7行目で最終的にその店の人がRの顔を見て笑ったという出来事を語っている。

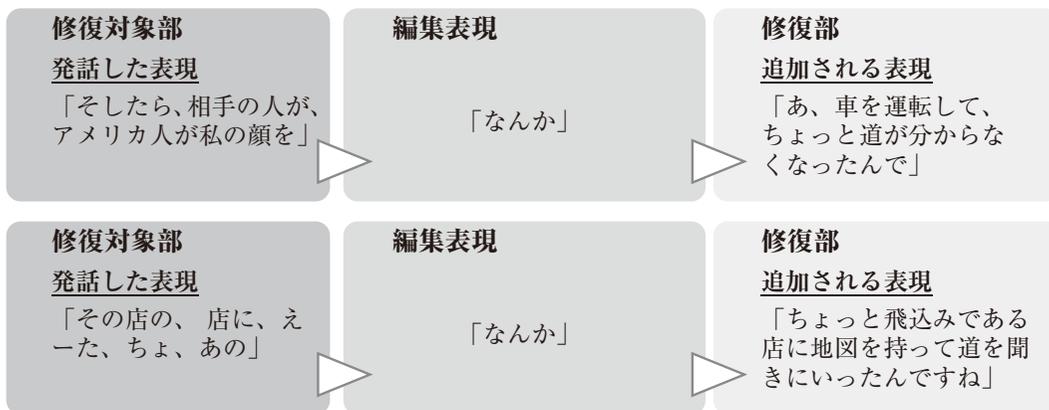


図4 事例2における「なんか」が用いられた修復の過程

このように話し手は、語や表現を言い換え、聞き手に対し不足しているかもしれない情報を追加している。話し手は「びっくりしたこと」である「自分の顔が笑われたこと」を説明するために、その過程で、笑った人がどこにいたのか、その場所をなぜ訪れたのか、という情報を聞き手に付加し、聞き手の理解を促していると考えられる。図4上段の修復では、「アメリカ人が私の顔を」と、自分が「びっくりしたこと」を発話しようとしたところで、そのアメリカ人とどこで出会ったのかについて聞き手が理解できないのではないかと察し、「なんか」という編集表現を用いつつ、ここで説明すべきよりふさわしい内容を検索していることが分かる。図4下段においても、修復対象部で「その店の、店に」と発話した後、聞き手になぜその店に入ったのかを説明する必要があると考え、編集表現「なんか」を発話し、ことばを探しながら説明すべき修復表現を提示している。

このように、事例1と2に見られる「なんか」を用いた修復において、話し手は聞き手の理解に必要なと思われる情報が不足していると考えているとき、編集表現である「なんか」を発話し、追加すべき表現を考えた後、更なる情報を加え、修復部で新しい表現として発話している。ここで使用される「なんか」を先行研究でも指摘されている働きの点から考えると、修復対象部に足りない説明を修飾部において発話することから、「発話内容を具体化させる働き」（内田 2001）と説明することが可能だろう。

5.2 トピックに直結する修復

事例1と2では、聞き手の理解を考え、詳細な情報を提供したいと話し手が考える際に発話の修復がなされていた。しかし、「なんか」が編集表現に置かれる修復には、語や表現を詳しく言い直すだけにとどまらない形が見られる。事例3は、先生と学生のペアによる会話（Rは先生、

Lは学生)である。話し手Rは、自分の家の玄関に、ある夜、知らない男が酔っ払って寝ていたという話をしている。Rはその知らない男に声をかけ、起こそうとするがうまくいかず、警察を呼ぶ事態になったことを説明している。

(事例3)

001: R: {笑い} すいません起きてくださいって言ったんです [けど

002: L: [はい

003: R: 全然びくともしないん [で

004: L: [はい

005: R: 警察に電話をしたんです [ね

006: L: [はい

007: R: そしたら、あのう、主人が電話をしたんですけども、なんか、落ち着いた声で主人が、こう、電話をしたんで=

008: L: =はい

009: R: むこ、警察のほうもあまり緊急ではないって思ったみたいで、

010: L: はい

011: R: むこ、警察のほうもあまり緊急ではないって思ったみたいで、玄関に人が寝てるっていうのを

012: R: 勘違いして玄関の外側に寝てるって=

013: R: =ああー [、はい

014: R: [思ったらしくて、そいで、家の

まわりで、全然来ないんでもう一回あたしがこんど電話をして、さっきから電話してるんですけども、警察の方おみえにならないんですけどってゆったら、そしたら、あのう、み、見たけど異常はなかったって言うんで、外側じゃなくて内側ですって言って {笑い}

015: R: で、もう一回来てもらって

(J-7)

話し手Rはこの出来事にびっくりして、その寝ている男に起きて帰ってほしいと言ったがうまくいかず、最終的に部屋で寝ていた夫を起こし、その夫が警察に電話をしたと説明している。7行目でRは、「主人が電話をしたんですけども」と言った後、その電話の様子を付加するように修復部で「落ち着いた声で主人が、こう、電話をしたんで」と言い直している。

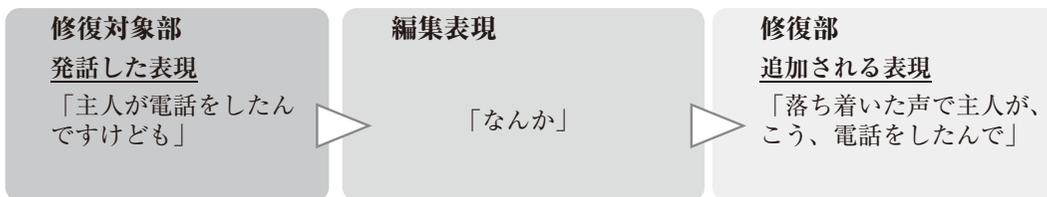


図5 事例3における「なんか」が用いられた修復の過程

この修復は、話し手が「びっくりしたこと」を話す上で重要な要素となっている。7行目の修復部「落ち着いた声で主人が、こう、電話をしたんで」は、修飾対象部で発話した「主人が電話をしたんですけども」に、より詳細な夫の行動と様子を加えており、結果、その落ち着いた様子が原因となり、警察がすぐに来なかったことにつながっている。つまり、「落ち着いた声で」という発話は、後の警察の対応を説明するために必要不可欠な情報である。「なんか」という編集表現は、談話の流れを組み立てながら、次に話そうとする内容に今発話した表現が適合しているかどうかを考える際に使用されていると言えるだろう。

次の例も、先生と学生のペアによる会話（Rは先生、Lは学生）である。話し手Lは、友人の実家に起こった「もめごと」について話そうとしている。

(事例4)

- 001 : L : あの、高校の友人ですごく親しい男友達 [が、
 002 : R : [うん
 003 : L : あのう、ま、いっし、わたし、あのう、じも、田舎から東京に
 出てきてるんです [けれども、
 004 : R : [ええ
 005 : L : ま、あのう、ま、いっしょにこちらに、あのう住んでいて、で、あのう、
 実家のほうでなんかいろいろともめごとが、もめごとっていうか、なんか、後継ぎ
のこともめたらしくっ [て
 006 : R : [うん=
 007 : L : =その子はすごくおしゃれて今っばい子なんです
 [けども
 008 : R : [ん
 009 : L : あのう、後継ぎがないということで、なんか、急遽、お坊さんになるという
 [決意をしたらしくて {笑い}
 010 : R : [へえ {笑い}、それはびっくりですね

(J-7)

話し手Lは5行目で、「もめごとが、もめごとっていうか」と二度「もめごと」という語を繰り返した後、「なんか」と編集表現を入れ、その後、修復部で「後継ぎのこともめたらしくって」

と言い直している。

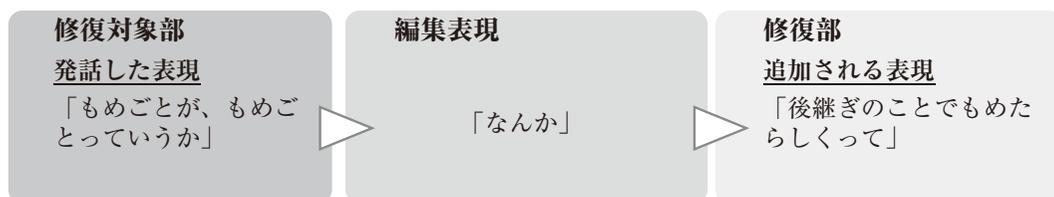


図6 事例4における「なんか」が用いられた修復の過程

この例においても、修復部に追加された「後継ぎ」という語がこのエピソードにおいて重要である。5行目の「実家」という語だけでは明らかではなかったが、9行目の「急遽、お坊さんになるという」という発話から理解されるように、Lの友人の実家が寺であること、つまり「後継ぎ」が必要であるということを含め言っておかなければならないということに気づいたための修復である。聞き手の立場から考えると、7行目で説明された「すごくおしゃれで今っばい子」が「寺の後継ぎ」につながる必要があると、話し手は聞き手に自分の「びっくりしたこと」を伝える上でこの修復が重要である。事例3と同様、「なんか」という編集表現は、話し手が談話全体の流れを組み立てながら、最終的に話そうとする「びっくりした」ことに、今発話した表現が適合しているかどうかを思考する際に使用されている。

次の事例5のLとRは、学生同士のペアである。Lは結婚式場のカフェでアルバイトをしており、頻繁にウェディングドレス姿の花嫁がカフェを訪れることを語っている。また、結婚式が重なる日は、多くの花嫁がカフェに立ち寄り、飲み物を飲む姿が見られることにびっくりしたと話している。

(事例5)

- 01: L : なんかがそれがね、ふつうなっちゃったから、今 [は、ああ、ああ、とか
 02: R : [ああ、ああ、[そうかそうか
 03: L : [なんかでも、
 その時は1人だけだったんだだけ [ど
 04: R : [うん
 05: L : あとね、結婚式がすごいかぶったりとかすると、
 5人ぐらい花嫁さんがなん、クローンみたいにいんの [笑い]
 06: L : なんかみんな白くてふんわりしたもの着てる人 [が [笑い]
 07: R : [げ [笑い]
 08: R : え [一
 09: L : [え、そう
 10: R : いいなあ
 11: L : [え

- 12: R: [あたし花嫁さんとかすごいあこがれる
 13: L: 似合いそう [だもん {笑い}]
 14: R: [{笑い}] でもだから、いいなあ、見れて
 15: L: ああ、[そうだねえ
 16: R: [うん
 17: L: ん、でも、なんかねえ、[なんか
 18: R: [{笑い}] びっくりするよ [ね
 19: L: [{笑い}] びっくりするよ
 20: R: {笑い} カフェにいないも [んね、ふつう
 21: L: [{笑い}] カフェ
 22: L: {笑い} しかも、あ、アイスコーヒーで、とか {笑い}

(J-12)

1行目でLは、アルバイトをしているカフェに、ウェディングドレスを着たまま花嫁がくることを、「ふつうなっちゃったから」、「ああ、ああ」と表現し、その状況が頻繁に起こることを聞き手に伝えようとしている。Lは5行目で、「5人ぐらい花嫁さんがなん、クローンみたいにいんの」と、結婚式が重なったときに花嫁が5人ほどカフェに集まってしまう状況があることを説明した後、「なんか」という編集表現を話し、6行目の修復部で、「みんな白くてふんわりしたもの着てる人が」と、複数の花嫁たちが幅広いドレスを着ていて、多くのスペースをとっていることを表現している。

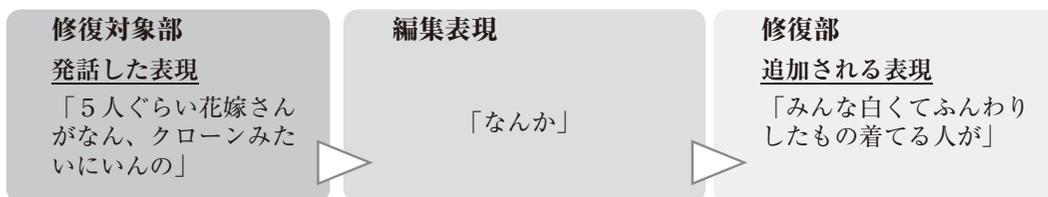


図7 事例5における「なんか」が用いられた修復の過程

話し手Lは、このような花嫁たちがカフェで飲み物を注文し、おそらくその衣装の形状や白い色から、飲みにくそうにしている姿に「びっくりした」と感じたことを伝えている。最終的に、話し手Lが自分の「びっくりしたこと」を話すためには、修復対象部で示した「複数人の花嫁が現れること」に加え、修復部で発話された「その花嫁たちがウェディングドレスのような広いスペースを必要とする衣装を着ていること」を伝えておくことが重要な要素である。「なんか」という編集表現は、話し手が談話全体の流れを組み立てながら、最終的に話そうとする「びっくりしたこと」に、今発話した表現がふさわしいかと思考する際に使用されている。

このように、事例3から5で見られた編集表現としての「なんか」には、談話全体を考慮しつつ発話を進める働きが見られることから、先行研究で指摘されている「次の発話内容をイメージとして持ち、談話を駆動させる働き」(杉崎 2019) が作用していると考えられる。

6. 「なんか」を用いた修復の働き

6.1 「聞き手志向型」修復と「話し手志向型」修復

5.1において分析を行った「なんか」を用いた修復では、話し手が聞き手の理解を気かけ、不足している情報を補足する例が見られた。今回のデータでは、二人の会話参加者のうちの一方が話し手となり自分の「びっくりしたこと」を話すため、話し手が発話産出を行い、聞き手はその発話を聞くという場面が多く見られるが、話し手は一方的にそれを行っている訳ではなく、常に聞き手の反応や理解を確認しながら話をしている。話し手は聞き手が理解できるように発話を組み立てようとしており、聞き手の理解が難しい場合は、その都度ことばを変えたり、補ったりと修復を加える。話を理解することは聞き手側の理解度による問題のように感じられるが、話し手側にもこれは重要な問題である。なぜなら、自分の伝えたいことを聞き手が理解することで初めて、談話構築が完了するからである。このような点から、5.1で分析した例は、聞き手が正しく理解するために不足している情報を補う「聞き手志向型」の修復と言える。

また、5.2で取り上げた「なんか」を用いた修復は、その修復がなされなければ、話し手の「びっくりしたこと」が完全に聞き手に伝わらないと予測される場面に起こっていた。つまり、この修復は話し手にとって、「びっくりしたこと」を聞き手に確実に伝えるために、次に話す内容との整合性を考慮した修復であると言える。5.1で示した修復が、聞き手の理解に問題が生じるタイミングで対処するものであるのに対し、この5.2の修復は、話し手がエピソードを構築する上で予め準備を行うための修復と考えられる。このような観点から、5.2で分析した例はいずれも、「びっくりしたこと」を話す上で必要不可欠な情報を提供するために行われる、「話し手志向型」の修復と定義することができる。

表4 「なんか」を用いた修復の働き

| 修復の特徴 | 「なんか」を用いた修復の働き | 事例 |
|----------------------------|---|----------|
| 情報を補足する修復 →「聞き手志向型」修復 | 聞き手の理解のため、不足しているエピソードの背景的な情報を補う。 | 1. 2. |
| トピックに直結する修復 →「話し手志向型」修復 | エピソードを話す上で、話し手がトピックに必要な不可欠だと考える情報を提示する。 | 3. 4. 5. |

6.2 「ローカルなテーマ」と「グローバルなテーマ」

談話構築の過程で、どのような要素をどの場所で、どのような表現に修復するかということは、話し手にとって非常に重要である。談話分析ではこれまで、どのような要素をどの場面で、どのような表現を用いて言及するかという問題について、「ローカルなテーマ (local theme)」と「グローバルなテーマ (global theme)」という二つの概念を取り入れ、説明してきた研究が見られる (Givón 1983, Bloom 1970)。「ローカルなテーマ」は、談話を流れる大きなテーマを支える背景的な情報と深く関わるものであり、登場人物や出来事の大きさ、場所などの要素を構成するも

のである。一方、「グローバルなテーマ」は、談話の主要なテーマであり、話し手は談話を構築する上で常にこのテーマを念頭に置き、結束性を保ちながら進めると考えられている。

このような観点から「なんか」を用いた「聞き手志向型」修復、「話し手志向型」修復を考えると、特徴的な傾向が見られる。「なんか」を用いた「聞き手志向型」の修復では、トピックに関わるバックグラウンドを語る際に修正が行われていた。ここでは、出来事の起こった時や場所などの情報が、聞き手に背景的知識として伝達されていた。この修復は情報として必要不可欠とまでは言えないが、話し手はミクロな視点から、より具体的な情報を付加し、聞き手に理解を促していた。このような点から、「聞き手志向型」の修復は、「ローカルなテーマ」との関わりが考えられる。一方、「話し手志向型」修復では、話し手は全体を流れる大きなテーマである「びっくりしたこと」を話す上で、必要不可欠な情報を発話するという、マクロな視点から修正を行っていた。これは、話し手が主要なテーマを常に意識していることを意味し、「グローバルなテーマ」との関わりが考えられる。これらのことから、話し手は常に全体を流れるテーマ「びっくりしたこと」を意識しながら談話構築を行い、そのテーマに自分の発話した内容が適合するかどうかを考えながら、一方で、聞き手の理解を得るための細かな修復を取り入れつつ語りを進めていると言える。聞き手もまた、話し手のこれら一連の発話や修復を受け取り、話し手の「びっくりしたこと」にたどり着くことで、最終的な理解へとつなげている。このように、談話構築の過程において、話し手と聞き手との間には「なんか」を用いた修復を介して、相互理解のコミュニケーションがあると考えられる。

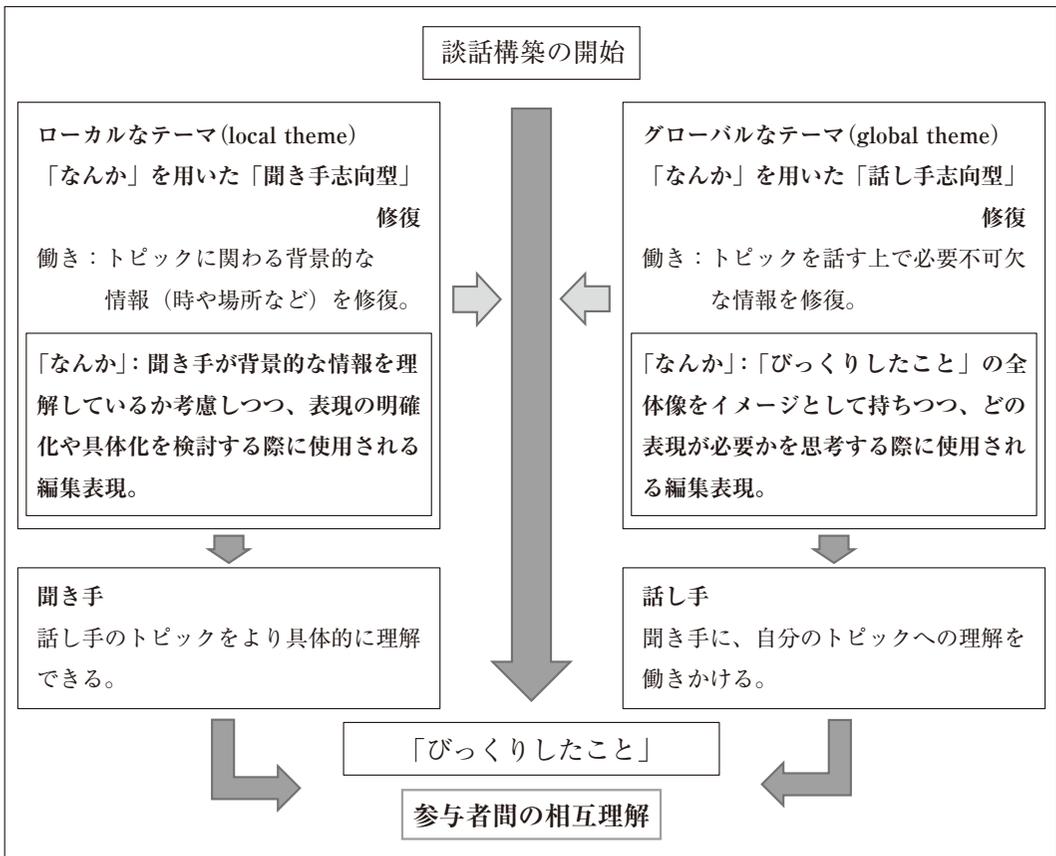


図8 ローカルなテーマ、グローバルなテーマから見た「なんか」を用いた修復の働き

編集表現として用いられる「なんか」は、「聞き手志向型」修復において、聞き手が背景的な情報を理解しているか常に考えながら、表現の明確化や具体化を検討する際に使用されている。つまり、「なんか」の持つ「発話内容を具体化させる働き」(内田 2001)がこの「聞き手志向型」修復で現れていると考えられる。「話し手志向型」修復では、「なんか」は話し手がこれから話す「びっくりしたこと」の全体像をイメージとして持ちつつ、予めどのような表現が必要であるかを思考する際に使用されていた。ここでは、「なんか」の持つ「次の発話内容をイメージとして持ち、談話を駆動させる働き」(杉崎 2019)が作用していると説明できるだろう。修復において用いられる編集表現には、語や表現が即座に産出されない状態を聞き手に示す「えーと」、「うーん」などのフィラー、また、修復部で言い換えを行うときに使用する「～というか」や「つまり」などのメタ的な編集表現が見られた(図1)。これらは修復対象部から修復部の間になされる表現として「なんか」と共通する点があるが、「なんか」が持つ「発話内容を具体化させる働き」や「次の発話内容をイメージとして持ち、談話を駆動させる働き」は担っていない。発話修復場面において、話し手はそれぞれの働きを認識し、編集表現の選択を行っていると考えられる。

7. おわりに

本稿では、「びっくりしたこと」を語る会話データを用い、特に会話参加者が発話修復場面に「なんか」を使用することに着目し、その談話上の働きを分析した。その結果、「なんか」を用いた修復は、話し手が聞き手の理解を考え、不足している情報を補う場面で多く使われる「聞き手志向型」修復と、これから話そうとするエピソードに適合しない場面において使われる「話し手志向型」修復の二つに分類された。「聞き手志向型」修復はローカルなテーマと関わりを持ち、発話内容を具体化していた。「話し手志向型」修復は、エピソード全体を流れるグローバルなテーマに関する修復を行うときに使用されていた。これら二つの修復の形は、話し手の修復と聞き手の理解に密接な関わりがあり、「なんか」を用いた修復は、談話の流れを確認しながら発話を遂行する上で、参加者間での相互理解をもたらす重要な役割を担っていると考察できる。また本稿では、編集表現として用いられる「なんか」が、「聞き手志向型」修復において、「発話内容を具体化させる働き」（内田 2001）を持つことを示し、「聞き手が背景的な情報を理解しているか考慮しつつ、表現の明確化や具体化を検討する際に使用される編集表現」と説明した。「話し手志向型」修復では、「なんか」の持つ「次の発話内容をイメージとして持ち、談話を駆動させる働き」（杉崎 2019）が作用していることを指摘し、編集表現としての「なんか」を、「びっくりしたこと」の全体像をイメージとして持ちつつ、どの表現が必要かを思考する際に使用される編集表現」と考察した。これらのことから、「なんか」はその他の編集表現（「えーと」、「うーん」、「～というか」、「つまり」）などとは異なる働きを持ち、修復場面においてコミュニケーション上の役割を果たしていることと結論付けることができる。

注

- (1) 船越・徳永（2004）、丸山（2008）の例文からも明らかであるように、編集表現は発話されない場合もある。
- (2) ミスター・オー・コーパスは、(1)課題達成相互行為、(2)一人語り、(3)会話、の三部構成からなっている。収集した言語は、日本語、アメリカ英語、韓国語、リビア・アラビア語、タイ語、中国語である。上記6言語・文化における異言語・文化間比較を可能にするために収集されたものであり、すべては、DVDに収録され、文字化されている。本稿で使用したデータは、「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」（平成15～17年度, No. 15320054, 研究代表者 井出祥子）によるものである。
- (3) 本稿で使用した文字化の表現法は以下の通りである。

| | | |
|-----|-----------------------------|------------------|
| [| 音声 | 音が重なり始めている時点を示す。 |
| 笑い | 笑い | 笑いを示す。 |
| 太文字 | 修復場面において「なんか」が発話されている箇所を示す。 | |
| 下線部 | 「なんか」と共起する表現を示す。 | |
| = | 二つの発話が途切れなく発話されていることを示す。 | |
- (4) 今回取り上げた「なんか」を用いた修復は、編集表現の位置に「なんか」が現れる形を対象としたため、「なんか」が発話された全体数の中では、その例は少数と言える。しかしながら、量的に際立った現象とは言えないが、他の編集表現であるフィラーやメタ的な表現とどのように異なるのかという観点から、その働きを質的に分析することは重要であると考えられる。

参考文献

- Bloom, Lois. 1970. *Language Development: Form and Function in Emerging Grammars*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time - the Flow and Displacement of Conscious, Experience in Speaking and Writing*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- 藤井洋子. 1995. 「日本語の語順の逆転について—会話中の情報の流れを中心に—」『日英語の右方移動構文—その構造と機能—』167-198. ひつじ書房.
- 船越孝太郎・徳永健伸. 2004. 「話し言葉における言い直しの処理」『情報処理』45. 10.
- Givón, Talmy. 1983. Topic Continuity in Discourse: An introduction. In T. Givón, ed., *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-language Study*. Amsterdam: Benjamins, 1-14.
- Halliday, M. A. K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar (Second Edition)*. London: Arnold.
- 飯尾牧子. 2006. 「短大生の話し言葉にみる談話標識「なんか」の一考察」『東洋女子短期大学紀要』38. 67-77.
- Kinjo, Katsuya. 2000. Inverted Utterances as Contextualization Cues: Interactional Sociolinguistic Analysis. 『言語文化研究紀要』Scripsimus(9): 13-27. 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系.
- 丸山岳彦. 2008. 『日本語話し言葉コーパス』に基づく言い直し表現の機能的分析. 『日本語文法』8(2), 121-139. 日本語文法学会.
- 松村明(編). 1999. 『大辞林』第二版. 東京: 三省堂.
- Nakatani, C. and Hirschberg, J. 1993. A Speech-first Model for Repair Detection and Correction. In *Proceedings of the 31st Annual Meeting of ACL*, 46-53.
- 日本大辞典刊行会(編). 1975. 『日本国語大辞典』第15巻. 東京: 小学館.
- Schegloff Emanuel A, Gail Jefferson and Harvey Sacks. 1977. The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation *Language*. Vol. 53, No. 2, 361-382.
- Schegloff Emanuel A. 2007. *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge University Press.
- 杉崎美生. 2019. 「自己開示場面における「なんか」の働き—コミュニケーションの観点から—」『待遇コミュニケーション研究』第16号. 1-17. 待遇コミュニケーション学会.
- 鈴木佳奈. 2000. 「会話における「なんか」の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化』9. 63-75.
- 田窪行則・金水敏. 1997. 『応答詞・感動詞の談話的機能文法と音声』東京: くろしお出版.
- 富樫純一. 2000. 「後置分析と後置表現の認定」『日本語と日本文学』30. 13-31. 筑波大学.
- 内田らら. 2001. 「会話に見られる「なんか」と文法化: 「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか?」『東京工芸大学工学部紀要』人文・社会編24(2). 1-9.

(英文学専攻 博士課程後期3年)